

二日目——朝

ソールズベリーにて

慣れないベッドでは、よく眠れたためしがありません。昨夜もわずかな時間、それも浅く眠っただけで、一時間ほど前に目が覚めてしまいました。もちろん辺りは暗かったうえ、今日もまた運転席での一日が待っておりまので、私はもう一度眠りにもどろうとしました。が、どうしても眠れず、仕方なく起き上がったときは、まだ電燈をつけねば髭もそれないほどの暗さでした。それでも、隅の洗面器で髭をあたつてから電燈を消してみますと、カーテンのへりに早朝の明るさが漂いはじめているのが見えました。

いま、カーテンを左右に開いてみたところ、外はまだほの暗く、もやがかかっているのか、向かいのパン屋と薬屋がなにやらかすんで見えるような気がいたします。通りを目で追い、小さな反り橋にさしかかる辺りを眺めますと、はたして川から立ちのぼる濃い

もやに、橋脚の一つがほほ覆い隠されているのがわかりました。通りには人一人見当たりません。どこか遠くから何かを打つような音がこだましてくるのと、宿の裏側の部屋からときどき誰かの咳が聞こえてくるだけで、あとはなんの物音もしません。もちろん、女主人が起き出している気配はなく、このぶんでは、昨夜言われた七時半までは朝食も期待できなようです。

こうやって、静寂の中で世界が目覚めるのを待つておりますと、いつの間にか、ミス・ケントンの手紙のあちこちを反芻している自分に気づきます。ところで、「ミス・ケントン」という呼び方については、もつと前にご説明しておくべきでした。正しくは「ミセス・ベン」といいます。もう二十年も前からそうなのですが、私が身近に接していたのは結婚前のミス・ケントンですし、ミセス・ベンになるためにコーンウォールに去つてからは、一度も会つたことはありません。この二十年間、心の中ではずっとミス・ケントンと呼びつづけてまいりましたので、不適當かもしれませんが、ここでもそのように呼ぶことをお許し願いたいと存じます。それに、先日の手紙によりますと、「ミス・ケントン」と呼ぶことが必ずしも不適當ではないかもしれませぬ。と申しますのは、悲しいことに、その結婚生活がいま破綻しかかっていると察せられるのです。もちろん、詳しい事情は何も書いてありませんし、また、ひとに聞かせるようなことでもありません。ただ、ヘルストンにあるベン家を出て、いまは近くのリトル・コンプトンという村で、知人のもとに身を寄